

特別寄稿

吉津宜英先生の学問

本年一月五日に急逝された吉津宜英先生（一九四三〜二〇一四）については、いくつかの雑誌に追悼文が寄せられることになっていく。私自身、吉津先生との関係は深く、現在、駒澤大学の教員となっているのも吉津先生の推輓のおかげだが、様々な思い出を記すのは別の機会に譲り、本稿では、編集係からの依頼に応え、吉津先生の学問の概要と特色について簡単に述べるにとどめる（以下、吉津宜英先生については「先生」と記す）。

先生は駒澤大学仏教学部禅学科に入学したものの、禅に關する論文は書けそうに思われなかつたという。たまたま酒井得元先生のお話をうかがう会で、酒井先生が『中論』に触れたのがきっかけで、卒業論文では『中論』を扱おうとしたところ、卒業指導会で鎌田茂雄先生から、『中論』を扱うなら宮本正尊先生のご指導を受けなさいと勧められた。それに従ったため、先生は日本印度学仏教学会理事長であつて東京大学定年後に駒澤大学の教授となつていた宮本先生の最後

の弟子となつた。

駒澤大学大学院に進むと、東京大学東洋文化研究所から母校の駒澤大学に非常勤講師として出講されていた鎌田先生に指導をお願いし、かつて世田谷区弦巻にあつた駒澤学園に先輩である池田魯参先生や同級生の石井修道先生などの俊秀才と早朝から参集して、破格の指導を受けたという。ゼミでは、吉蔵の研究を柱として中国三論教学という新たな研究分野を切り開きつあつた平井俊榮先生の授業が中心であつたため、インドの中観派ではなく、漢訳『中論』やその他の鳩摩羅什の訳書に關わる南北朝から隋頃の中国仏教の研究に打ち込むようになったようだ。最初の論文は、日本印度学仏教学会での発表に基づく「慧影の『大智度論疏』をめぐる問題点」（『印度学仏教学研究（以下、印仏研）』第十六卷第一号、一九六七年十二月）であり、以後も、「北土智度論師について」（『印仏研』第十七卷第二号、一九六九年三月）など、そうした研究が続く。一方、「吉祥大師研究序説」（駒澤大学大学

石井公成

院仏教学研究會年報」第三号、一九六九年三月）、「吉藏の唯識大乘義批判」（『印仏研』第十八卷第一号、一九六九年十二月）などのように、吉藏関連の論文もあり、吉藏を中心として三論教学研究を進めていた平井先生の影響の強さがうかがわれる。

こうした傾向と並んで注目されるのが、翌年発表した「中国仏教におけるアビダルマ研究の系譜」（『印仏研』第十九卷第一号、一九七〇年十二月）だ。これは、吉藏などの中観派の論師たちが批判していた相手を説明するという意図もあっただろうが、平川彰先生の指導のもとで、平井先生が優秀な若手研究者を動員して作成していた『俱舍論』の漢訳・梵語の対照索引とも関係していよう。平川先生を筆頭著者とし、平井俊榮・吉津宜英・袴谷憲昭・高橋壯の共著という形で一九七三年から一九七八年にかけて大蔵出版から出版され、一九八〇年に日本学士院賞を受けた『俱舍論索引』全三部の作成に取り組むうちに、アビダルマそのものに対する興味、中国におけるアビダルマ教学の実態と影響に関心をいだくようになつたものと推測される。

「中国仏教における大乘と小乗」（『駒澤大学佛教学部論集（以下、論集）』第一号、一九七一年三月）は、これらの研究を踏まえ、中国仏教の実態を考察しようとした意欲作だ。大乘と小乗という視点は、中国仏教を研究するうえで万能の

分類でなく、「神異・感通などを考える座標にはなりえない」といったすぐれた指摘が見られる。大乘とは何か、とりわけ中国における大乘とは何かという視点は、以後も長く先生の研究を支えるものとなつた。

この時期で着目されるのは、「道元禅師の経師論師批判」（『宗学研究』第十三号、一九七一年三月）のように、中国仏教研究で得られた知見を道元研究に生かそうとする姿勢が見られることだろう。曹洞宗の僧侶としては当然なようだが、この姿勢は、晩年まで変わらなかつた。

この頃から目立つのは、「経律論引用より見た『大乘義章』の性格」（『論集』第二号、一九七一年十二月）が示すように、浄影寺慧遠に関する論文が増えることだろう。これは、平井先生の三論宗研究に相当するような新たな分野を開拓したいという思いがあつて、それが地論宗研究につながつたものと推測される。初期の先生の仕事の中で、最もまとまつた業績があり、今日でも有益なのは、この慧遠研究だろう。「大乘義章八識義研究」（『駒澤大学佛教学部研究紀要（以下、紀要）』第三十号、一九七二年三月）などは、すぐれた論文であり、多くの研究者に引用されている。

その慧遠研究、また中国における大乘仏教の特色に関する研究と結びついて生まれたのが、慧遠の『大乘起信論』注釈に関する一連の研究だ。「慧遠の『起信論疏』をめぐる諸問

題(上)」「論集」第三号、一九七二年十二月)が、その最初であって、次々に研究が深まっていく。

そうした中で生まれた諸論文のうち、「地論師という呼称について」(『紀要』第三十一号、一九七三年三月)や、「慧遠の仏性縁起説」(『紀要』第三十三号、一九七五年三月)などは、中国仏教研究者にとつて必読とも言うべき労作であり、今日でも引用されることの多い論文だ。

こうした状況を変えたのが、鎌田先生が主催し、吉津先生が司会と事務を担当されて始まった『釈華嚴教分記円通鈔』の読書会だった。法蔵の『華嚴五教章』に対する高麗華嚴宗の均如の注釈を読むこの会は、朝鮮半島の華嚴教学を研究する必要がありという鎌田先生の思いに基づいて始まったものだが、鎌田先生の狙いの中には、吉津先生を華嚴研究に進ませるきっかけ作りという面もあったように思われる。というのは、鎌田先生は早くから吉津先生に対して、華嚴教学も学ぼうと勧めておられたからだ。

華嚴教学の研究の第一人者であった鎌田先生は、おそらく、この会を通じて吉津先生が駒澤で華嚴学を盛んにされることを期待し、また関東全体の華嚴研究のレベルをあげようとしたのだらう。実際、留学生を含め、東京周辺で華嚴教学や関連する分野を調査している諸大学の研究者や大学院生のほとんどが参加したため、この会は、若手育成の道場のような存

在となった。人好きで明るく、また神経が細やかで事務も得意だった吉津先生は、この会のもとめ役としては最適の人物だった。私が、先生と話すようになったのも、この会に出させていただくようになってからのことだ。

また、当時は、鎌田先生の親友である韓国の金知見先生が『華嚴五教章』テキストの異本に関する問題提起をし、法蔵の兄弟子である新羅の義湘が法蔵の草稿本を訂正したとする主張を展開したため、鎌田先生の師の一人であって、日本伝来の和本を重視する結城令聞先生と論争になっていくことも見逃せない。鎌田先生は、均如の注釈を精読していく中で、この問題についても解決をはかろうとしたものと思われる。そうした状況のもとで、吉津先生の初の華嚴関連の論文、「華嚴五教章の鍊本について」(『印仏研』第二十六巻第一号、一九七七年十二月)が発表された。問題の複雑さを明確に論じた客観的な議論だった。

これをきっかけとして、先生は、『五教章』のテキスト問題解決のためもあって、法蔵の伝記、著作の成立年代、そして教判などの研究に猛烈な勢いで取り組み、次々に論文を発表していくこととなった。木村清孝先生の博士論文、『初期中国華嚴思想の研究』(春秋社、一九七七年)が刊行されたことも、刺激になったらう。

これにさらに加わったのが華嚴宗と禪宗の関係という問

題だ。「澄観の禪宗観について」（『宗学研究』第二十二号、一九八〇年三月）が示すように、禪宗の影響が強い華嚴宗第四祖澄観や第五祖宗密の研究にも踏み込むうちに、禪宗と関わる「頓教」の問題に踏み込まざるを得なくなったことも一因だろう。この時期から、澄観に関する論文と禪宗に関する論文が発表されるようになる。これには、早くからの禪宗研究への関心に加え、鎌田先生の学問を受け継ぐという面もあったように思われる。

もう一つ加わるのが、「法蔵『大乘起信論義記』の研究―それ以前の諸注釈書との比較を通して」（『論集』第十一号、一九八〇年十一月）が示すように、『起信論』への関心だ。これまでも、慧遠の『起信論』解釈に関する研究がなされていたが、この頃から、中国の『起信論』解釈について研究するだけでなく、真偽論争の盛んな『起信論』そのものの成立の問題、『起信論』そのものの思想と中国の諸注釈の解釈の違いについても研究がなされるようになったのだ。そのためには、『起信論』の注釈の代表であって、現代の研究者の『起信論』解釈に大きな影響を与えた法蔵の『起信論義記』を研究する必要がある。

この傾向を進めるきっかけとなったのが、戦後における『起信論』研究の到達点である柏木弘雄『大乘起信論の研究』（春秋社、一九八一年）の刊行だろう。この名著に対して、先生

は早速、『論集』第十二号（一九八一年十月）で書評を書かれたが、十三頁もある力作であり、ほとんど論文に近いものだった。この四年後に、『起信論』の用語は菩提流支など北地地論宗関連の訳経の用語と類似することを詳細に論じた竹村牧男『大乘起信論読釈』（山喜房仏書林、一九八五年）が刊行された時も、先生は詳細な書評を書いておられる。

その一九八五年三月には、初めての単著、『華嚴禅の思想的的研究』が大東出版社から出版された。法蔵を中心として華嚴教学の成立を論じ、澄観・宗密に対する禪宗の影響を精査し、宗密において成立したのは、『円覚経』や中国思想の影響が強く、華嚴宗でも禪宗でもない「華嚴禅」だったと批判的に論じた考察だ。本作は、中国仏教史における華嚴宗と禪宗の関係を明示した力作であり、今でも価値が高い。

先生は、この年の四月から在外研究として、親しい天台研究者のポール・グローナー先生が在職するアメリカのヴァージニア大学宗教学部におもむき、約十一ヶ月滞在して「日本における天台と華嚴の交流に関する共同研究」に従事された。この期間には、グローナー先生の『起信論』ゼミに参加して活躍されたほか、複数の学術大会にも参加されている。なお、アメリカでは禪宗研究が盛んであり、その思想的基盤の一つである華嚴教学への関心も強いため、先生の華嚴禅の書物は格好の土産として歓迎されたと聞いた。

ここでアメリカの研究者との交流の幅が広がった意義は大きく、帰国後は、気さくで親切的な先生のもとに、アメリカや欧米の研究者が多数訪れるようになった。これは、韓国・台湾・中国など、アジアの研究者の場合も同様だ。先生の学問的な業績の一つとして、諸国の研究者との交流の推進と支援という点をあげるべきだろう。

グローナー先生やその学生との共同研究を通じて吉津先生が気づいたのは、日本仏教の場合、最澄も空海も法藏の影響を受けておりながら、その「因分可説、果分不可説」を不満に思い、それぞれの立場を華嚴の「因分可説、果分不可説」を乗り越える「果分可説」の立場として位置づけていたことだったという。この発見は、以後、先生が日本仏教の大きな流れを考えるうえでの柱の一つとなった。

ただ、帰国した一九八六年には、先に触れた竹村牧男『大乘起信論説釈』の書評を書き、またアメリカ遊学報告を書いたものの、以後、論文はめっきり少なくなる。その主要な理由は、曹洞宗の差別事件をきっかけにして起きた批判仏教運動だったと思われる。この年三月には『紀要』第四十四号に、同級生かつ仏教学部の同僚である袴谷憲昭先生の「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」が掲載され、同じ三月刊行の『宗学研究』第二十八号には、袴谷憲昭「道元理解の決定的視点」が掲載された。悪質な差別思想の根源は、根

本での平等を説きつつ現実面での区別を説く本覚思想だとする主張であって、「本覚」を説いた『起信論』や華嚴教学は差別思想であり、道元禪師が一生かけて批判したのは、まさにこうした思想だったと断定されたのだ。

吉津先生は、宗密などについては、その少し前から批判的に眺めるようになっていたが、袴谷論文によれば、宗密ばかりか、慧遠にしても華嚴教学にしても、これまで自分が意義を認めて研究してきた対象は差別を助長した悪質な非仏教思想ばかりであり、道元が嫌ったものだったことになる。研究者として、また曹洞宗の僧侶として、悩まれたことだろう。

実際、学部同僚であって三論教学の研究者であった伊藤隆寿先生は、様々悩んだ結果、吉津先生のアメリカ滞在中に、これまでの自らの研究姿勢を改めて批判仏教側の立場から直しをすべきことを決意し、袴谷論文が載った同じ『紀要』の号に「梁武帝「神明成仏義」の考察―神不滅論から起信論への一視点―」を発表されていた。『起信論』は、中国思想の影響が濃い偽作だとする主張だ。さらに、この年の六月には、同僚の松本史朗先生が日本印度学仏教学会学術大会において「如来藏思想は仏教にあらず」を発表し、世界の仏教学界にショックを与え、センセーションを巻き起こした。この論文は、同年十二月の『印仏研』第三十五巻一号に掲載されている。袴谷、松本、伊藤の三先生は、以後、そうした立場

の論文を次々に発表していった。

論文を精力的に発表して来られた吉津先生の筆は、ぱたりと止まった。以後、数年の間に書いたのは、宗旨に関するエッセイ風な小文と、アメリカでの学会参加報告にすぎない。華嚴に関する研究が発表されるようになるのは、一九八九年になつてのことだ。しかも、題目は「法蔵の大乘大乘への批判について」（『印仏研』第三十八巻第一号、一九八九年十二月）であつて、「批判」の語が入つている。本稿は、師匠である智儼の包含的な一乘義と法蔵の一乘義を比較し、法蔵は『法華経』をよりどころとする諸師の一乘思想を批判して、『華嚴経』のみを別教一乘として礼賛しようとすることを指摘したものだ。つまり、題目に見える「批判」の語は、かたよつた論難、強引な思想構築というニュアンスをこめて使われているのだ。批判仏教に一定の意義を認めつつも、攻撃的な論難ぶりに賛成できなかった先生の心情、あるいは揺れ動いた姿勢が示されている。

しかも、続いて書いた華嚴関連の論文は、「法蔵以前の『梵網経』諸注釈書について」（『紀要』第四十七号、一九八九年三月）だった。華嚴教学関連には違いないものの、如来蔵縁起の思想を確立した法蔵を扱いながら、そうした点には触れておらず、その『梵網経菩薩戒本疏』を取り上げ、それ以前の梵網戒の注釈の流れと比較したものだ。『梵網経』を三乘

と見る智儼と、『梵網経』の菩薩戒を尊重しつつ華嚴の一乘思想との違いも説く法蔵の微妙な位置を明らかにするためであつたろう。これ自体はきわめて有意義だったが、如来蔵に関する問題から逃れたという面もないでもない。

ただ、先生は一九八九年九月に「華嚴同別一乘の成立と展開—法蔵の別教一乘の特異性—」（『仏教学』第二十七号）を発表したことが示すように、法蔵に対する批判的な観点に立ちながら、如来蔵思想と関係深い「一乘」の問題に再び精力的に取り組むことになつた。これには、同僚である親友の石井修道先生の博士論文、『宋代禅宗史の研究 中国曹洞宗と道元禅』（大東出版社）が一九八七年に出版され、また批判仏教側としては、一九八九年七月に『大乘起信論』に関する批判的覚え書を含む袴谷憲昭『本覚思想批判』（大蔵出版）、そして同月に松本史朗『縁起と空—如来蔵思想批判—』（同）が続けて出版されたことも大きかつたろう。

安易な通説を批判する批判仏教運動の意義を認めつつ、その激しい論難方法に反対であつた先生は、以後、「異議申し立て」を意識した論文を書くようになった。「異議申し立て」という語については、初めは批判仏教側の姿勢について用いていたのだが、後には先生自身の立場を表す語として、用いるようになったのだ。つまり、自らを正しい仏教の側に属するものとみなしたうえで邪悪な対象を批判するといふのでな

く、歴史上の史実の問題点や現代の解釈における疑問点について、一人の研究者として疑問の声をあげ、ありうる意見の一つとして異議を申し述べるという意味で使うようになったのだ。論文もそうした立場を意識して書くようになったように見える。

その結果、生まれたのが博士論文である『華嚴一乗思想の研究』（大東出版社、一九九一年）だ。本書は、鎌田先生の均如読書会での共同研究をきっかけとした自らの研究成果をまとめたものであり、七〇〇頁を越える巨冊となっている。同別二教判の問題に注意しつつ、華嚴教学における一乗思想の成立と展開を追求した本書は、戦後における代表的な華嚴教学研究書の一つと評価されよう。如来藏思想系の一乗思想とそれに反対する法相宗系の三乗思想の対立に関する研究は多いが、本書は、隋唐と新羅の一乗思想の中には様々な系統があること、また法藏は他の立場の一乗思想について批判していることを明らかにしており、東アジア仏教研究の中でも重要な貢献をした力作だ。

本書は、一方では、冒頭の「研究方法」において明言しているように、思想的的研究を通しての法藏の一乗解釈やその他の問題に対する「異議申し立て」をおこなった苦闘の産物でもあった。「思想史」という面にこだわるのは、鎌田先生の学問方法でもあったうえ、「批判的」と自称する批判仏教

を批判したピーター・グレゴリー先生が、自らの研究方法を「思想的的研究」と呼んだことも関係しているだろう。

この刊行以後、先生は「仏教思想史論」（『論集』第二十四号、一九九三年）が示すように、あれこれ悩みながら、自分にとつての仏教、仏教学の意味を問い、大きな仏教史の枠組みについても私見を打ち出すようになり、一般向けの著述も執筆するようになった。また、一方では、「道元における『宗』について」（『宗学研究』第三十六号、一九九四年三月）といった道元に関する考察も発表もするようになっていった。先生にあつては、中国仏教研究は常に道元研究と結びついていたのだ。

この年の四月、筆者は先生の推輓によって駒澤短期大学仏教学部に就職し、先生の研究室の真向かいの研究室に入った。華嚴教学や『起信論』の注釈を研究する仲間が身近に来たことは、批判仏教の問題に悩みながら研究の方向を模索していた先生に、多少の影響を与えたように思われる。先生はこの年の十二月、平川先生が創設し、高崎直道先生が理事長を継いだ仏教思想研究会の会誌、『仏教学』の十周年特集に「中国仏教研究の一動向―『批判的研究』について」を寄せ、自らの立場を鮮明に披瀝された。

この時期には、少し前から柴崎照和氏と共同で進めてきた高麗の義天編集の華嚴文献集成である『円宗文類』の研究に

も力を入れており、この数年のうちにくつも論文を発表している。また、二〇〇〇年になると『大乘止観法門』の再検討』（『印仏研』第四十八巻第二号、二〇〇〇年三月）、「浄影寺慧遠の起信論引用について」（『印仏研』第四十九巻第一号、二〇〇〇年十二月）や、「吉藏の大乗起信論引用について」（『印仏研』第五十巻第一号、二〇〇一年十二月）などのように、『起信論』の成立に関わる問題について再び精力的に論文を発表するようになった。

ただ、二〇〇一年五月に恩師の鎌田先生が亡くなられたショックは大きく、しばらくの間、論文が減っている。その先生が立ち直って発表した重要な論考は、高崎直道先生との共著として出版する予定であった真諦三蔵の本のために、かなり前から書き進めていた「真諦三蔵訳出経律論研究誌」（『紀要』第六十一号、二〇〇三年三月）だった。思想内容を担当するはずであった高崎先生の執筆が遅れ、刊行のめどが立たなかったため、訳出経論の研究の部分を論文として発表したのだ。この論文は、『起信論』の訳者とされてきた真諦三蔵に関する詳細な基礎研究であり、『起信論』や真諦三蔵に関する諸国の研究者が読むべき必読文献となっている。先生の場合は、法蔵研究でもそうだったが、思想そのものに取り組む場合と、その予備研究として著作の成立年代や伝記の研究に取り組む場合があり、いずれも学界に貢献している。

その後も、力作である「起信論と起信論思想―浄影寺慧遠の事例を中心に―」（『紀要』第六十三号、二〇〇五年）を発表しており、この問題への関心の深さがうかがわれる。また、一方では、「東大寺大仏造立の意義」（『印度哲学仏教学』第二十一号、二〇〇六年）など、日本の華嚴に関する論文も増えていく。この方面の関心は、自分の研究する華嚴教学が、戦時中は大東亜共栄圏を正当化する理論として利用された以上、この問題について発言しておく義務があるという責任感とも結びついていたように思われる。この時期には、批判仏教をきっかけとして深められた仏教観、道元観に関する論文やエッセイも多い。

ただ、二〇〇〇年代後半から二〇一〇年代前半には、体調不良の時期が何度かあったこともあり、かつてのような粘り強い詳細な研究が減って、一般向けのエッセイや、仏教研究ないし日本仏教に関する提言のような文章が増えていく。そうした中で、学問的な成果としてあげられるのは、『大乘起信論』実又難陀（S本）の成立』（『仏教と文化―多田孝正博士古稀記念論集』、二〇〇八年）などであって、やはり『起信論』が関心の中心であったように見える。

二〇一〇年十一月には、『構築された仏教思想法蔵―「一切即一切」という法界縁起―』（佼正出版社）が出版されているが、一般読書人向けの入門書であり、これまで書いてきた

内容や、関連研究者の研究をわかりやすくまとめたものという印象が強い。まとめという点では、二〇一一年秋に中国西安の陝西師範大学で日本仏教について講演された内容に基づいて発表した「日本仏教の回顧・現状・課題―陝西師範大学での講演を機縁として」（『佛教経済研究』第四十一号、二〇一二年五月）も、華嚴の役割に注意しつつ日本仏教の特色と問題点を述べたものであり、この当時における先生の仏教観をまとめたものとなっている。

先生は、定年前の最後の年となる二〇一三年度の初めに体調を崩し、短期の休養を経た後、長期の休養に入られた。前年に書かれていて休養の直前の二月に出版されたのは、『大乘起信論』の如來藏義（伊藤瑞穂博士古稀記念論文集刊行会編『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞穂博士古稀記念論文集』山喜房仏書林、二〇一三年）だ。これは、『起信論』が説く如來藏は、『仏性論』の三種仏性で言えば、衆生が仏に包まれているという所撰藏であって、通説のように、衆生のうちに如來藏があるとする能撰藏の立場で解釈するのは誤りだ、という議論だ。この主張は、直接には先生が敬愛してきた高崎直道先生などの説に対する批判であり、それだけに先生は注意しつつ検討を重ねてこられた。

そして、五月に長期休養に入る直前まで手を入れていた原稿は、昔の論考に先生の最近の説を加えた『起信論』に関する

る著作であり、ここでも、右の主張が中心となっている。この著作は、表記や出典記載の不備・不統一などについて最低限の訂正を加えたうえで、この秋に大蔵出版から刊行される予定だ。つまり、遺著は『起信論』に関する著作なのであり、二十代後半から七十歳になるまで、『起信論』にかかわり続けたことになる。先生の名著である『華嚴一乘思想の研究』においても、第七章「大乘起信論義記」の成立と展開」は、中国・新羅・日本にわたる精細な考察であり、本書の重要な柱となっている。

駒澤大学が大好きであって、定年後にやることについて心配しておられた吉津先生には、「退職されたら、二十代後半から三十代にかけて打ち込んでおられた北地の仏教学研究に戻り、淨影寺慧遠に関する研究をまとめて本にしてください」と何度もお願いしていたのだが、実現しないで終わったのは残念でならない。当時の先生の論文は、様々な問題提起と発見に満ちている。本にまとめずに終わった先生のこれらの貴重な研究を若い研究者が受け継ぎ、発展させてくれることを期待する。

〈追記〉末尾で触れた『起信論』に関する遺著は、『大乘起信論新釈』と題して十月二十日に大蔵出版から出版された。